理学療法学科学生の大学生活における不安

——大学生活不安尺度による検討——

*Anxiety of the Students of a Department of Physical Therapy Connected
to Their Campus Life: Research Using College Life Anxiety Scale*

菅沼 一男¹⁾ 平林 茂¹⁾ 大日向 浩¹⁾ 金子 千香¹⁾

KAZUO SUGANUMA, RPT¹⁾, SHIGERU HIRABAYASHI, MD, PhD¹⁾, HIROSHI OHINATA, PhD¹⁾, CHIKA KANEKO, RPT¹⁾

¹⁾ Department of Tokyo Physical Therapy, Faculty of Medical Science, Teikyo University of Science: 2-2-1 Senjyusakuragi, Adachi-ku, Tokyo 120-0045, Japan. TEL+81 3-6910-1010 E-mail: suganuma@ntu.ac.jp

Rigakuryoho Kagaku 30(2): 193-196, 2015. Submitted Oct. 6, 2014. Accepted Nov. 19, 2014.

ABSTRACT: [Purpose] To investigate the anxiety with campus life of department of physical therapy students. [Subjects] Seventy third-year university students, facing long-term practical training outside the campus. [Methods] The students were surveyed using the college life anxiety scale. [Results] In the comparison of students repeating the same year with those who were not, uneasiness with everyday life was higher in the former. In the comparison of males and females, uneasiness with everyday life and the total anxiety assessment were higher among males, and maladjustment to university was higher among females. [Conclusion] Because uneasiness with everyday life is higher among students repeating the same year, support for these students is especially necessary. In this study, long-term practical training outside the campus was considered to have influenced students' uneasiness with everyday life; therefore, it will be necessary to confirm the chronological changes by comparing students' conditions between pre- and post-practice.

Key words: college life anxiety scale, anxiety, physical therapy

要旨:〔目的〕理学療法学科に在籍する学生の大学生活不安を調査することとした。〔対象〕4年制大学の理学療法学科3年次に在籍し、長期臨床実習を間近に控えた70名の学生。〔方法〕集合調査法による回答から得られた大学生活不安尺度を留年未経験者からなる群と経験した者からなる群との間で比較した。〔結果〕留年経験者の群の日常生活不安が未経験者の群に比べてより高値を示した。男女の比較では、日常生活不安の程度と総合得点で男性が高値を示し、大学不適応の程度では女性が高値を示した。〔結語〕留年を経験すると日常生活不安が高くなることから、これらの学生に対する支援が必要である。また、臨床実習が大学生活不安に影響を及ぼす一因と推測されることから、実習後との比較など経時的変化の検討を行う必要がある。

キーワード: 大学生活不安尺度, 不安, 理学療法

¹⁾ 帝京科学大学 医療科学部 東京理学療法学科: 東京都足立区千住桜木2-2-1 (〒120-0045) TEL 03-6910-1010

受付日 2014年10月6日 受理日 2014年11月19日

I. はじめに

近年は、大学数の増加と高校生数の減少とが相まって、「大学全入時代」を迎えており、言い換えれば、好みを言わなければ誰もがどこかの大学へ入れる時代となった。しかし、この結果、明確な目的意識や自らの将来の展望を持たずに大学へ入学し、入学後に改めて、その意義を問い直したうえで「進路変更」や「一身上の都合」を理由に、大学を中退する学生が増加していると言われている。この「一身上の都合」の中には、学業や人間関係の問題から授業を欠席しがちとなり、大学不適応をおこして休学、留年、そして最終的には退学していくという実情も含まれていると考えられる。山田¹⁾は、大学1年生から4年生までの4,070名を対象に調査した結果、全体の45.7%が不本意な入学や学業面でのつまずき、友人関係の問題を抱え他大学への再入学を希望していると報告している。

最近、我が国の社会における高齢化の一層の進行と、大学生の就職難とを反映して、医療系の資格を取得する目的で医療系学科を受験する学生が増加している。しかし、医療系学科では医療の専門家を養成するカリキュラムが組まれており、膨大な知識や技術の習得や臨床実習が課せられ、卒業直前まで国家試験に備えて、学習しなければならない。また、臨床実習では、学力のみでなくコミュニケーション能力も問われることが多い。学力やコミュニケーション能力に問題のある学生は、定期試験、臨床実習がクリアできずに大学不適応をおこし、結果として、その進路が留年や退学に結び付きやすいと考えられている。このため、大学不適応を起こしている学生を早期に発見し、支援または適切な進路変更へのアドバイスを行うことは、当該学生のみならず、ともに学んでいる周囲の学生や、教育の場を提供している大学にとっても重要な課題である。

医療系学科は、生体を対象とする職種に就くための学科であることから、他学科と比べて進級要件が厳しいと考えられ、このため、学生の多くが学生生活に不安を抱えやすい傾向があることが予測される。しかし、これまで、大学生の学生生活不安についての報告は、ほとんどが医療系学科以外を対象としたものであり、我々が渉猟した範囲では、医療系学科を対象とした報告はなかった。

本研究の目的は、理学療法学科に在籍する学生を対象として、大学生生活不安尺度を用いて、大学生生活における不安についての実態調査を行うことである。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、4年制大学の理学療法学科3年次に在籍し、

8週間におよぶ長期臨床実習を間近に控えた学生70名（男性36名、女性34名）で、平均年齢は 21.3 ± 0.5 歳であった。そのうち、留年の経験者（以下、留年経験群）は20名（男性16名、女性4名）であった。

2. 方法

大学生生活不安尺度（College Life Anxiety Scale 以下、CLAS）とは、(1)大学の日常生活に対する不安感、(日常生活不安；14項目)、(2)大学における単位や試験に対する不安感（評価不安；11項目）、(3)「不登校」や「中退」といった就学上の問題を生じさせる大学不適応感（大学不適応；5項目）の30項目の設問から構成される。回答は、「はい」、「いいえ」の2件法で求め、不安傾向に該当する方向へのものを各1点とし、CLASプロフィール得点換算表にて得点を換算する。この得点が高いほど不安を抱えていることを示す。なお、CLASの信頼性、妥当性についての検証はすでになされている¹⁾。

対象者に対し集合調査法にて、この尺度の評価を実施した。まず、「指示があるまで始めないように」と指示し、大学の成績に影響することは全くないので、安心してありのまま回答するよう説明した。その後、必要事項（検査日、学籍番号、学年、性別、氏名）を記載してもらい、開始の合図で回答を開始させた。また、全員の回答が終わるまで私語を慎むように指示した。

順調に進級した留年未経験の群（以下、現役群）と留年経験群との間および男女間の比較を行った。統計学的解析は、各検定に先立ちShapiro-Wilk検定および等分散性の検定を行い、正規性および等分散性が確認された時は、対応のないt検定を用い、それ以外の場合はMann-WhitneyのU検定を用いた。統計ソフトウェアはPASW statistics 18 (SPSS Japan)を使用し、危険率5%未満をもって有意と判断した。

なお、本研究は、帝京科学大学の倫理審査委員会で認可されたあと、対象者には本研究の意義と大学の成績に影響することは全くないことを説明し同意を得た上で実施した。

III. 結果

現役群と留年経験群の比較では、日常生活不安が、留年経験群 71.5 ± 15.0 （平均値±標準偏差）、現役群 60.6 ± 13.9 であり、留年経験群が有意に高値を示した。評価不安、大学不適応、全体得点は両群間に差が認められなかった。男女の間の比較では、日常生活不安が男性 72.6 ± 15.2 、女性 54.2 ± 6.5 、全体得点が男性 65.6 ± 15.4 、女性 56.8 ± 8.3 であり男性が有意に高値を示し、一方で大学不適応では男性が 48.7 ± 7.0 、女性 55.9 ± 10.0 であり女性が高値を示した（表1）。

表1 留年経験の有無および男女の間の大学生活不安尺度の比較

	留年生	現役生	男性	女性
日常生活不安	71.5 ± 15.0*	60.6 ± 13.9	72.6 ± 15.2*	54.2 ± 6.5
評価不安	58.9 ± 12.1	56.7 ± 13.1	58.5 ± 13.9	56.1 ± 11.6
大学不適応	52.3 ± 8.5	52.1 ± 9.7	48.7 ± 7.0*	55.9 ± 10.0
全体得点	64.0 ± 10.7	60.2 ± 13.9	65.6 ± 15.4*	56.8 ± 8.3

平均値 ± 標準偏差. *: $p < 0.05$.

IV. 考 察

現在わが国では、大学への進学が50%を越え、専門学校などの高等教育機関を含めると70%の学生が進学をしている。そのため、高等教育機関では、学生確保のために早期から様々な形態の入学試験を実施している。多様化した入学試験の実施は、個性や高校生活を評価できる方法である反面、十分な学力や目的意識のない学生を入学させてしまう危険性も伴う。藤井²⁾は、必ずしも十分な学力水準に到達していない学生が多く入学するようになってきており、また、集団に馴染めず、人間関係に息苦しさを感ずる学生も増えてきており、このことが、大学不適応傾向の学生が増加する原因となっていると述べている。したがって、大学は大学生活における不安を分析し、問題のある学生を早期に発見し、支援することが必要である。

本研究は、理学療法学科に在籍する3年生を対象に、大学生活における不安についてCLASを用いて検討した。まず、留年経験群と現役群の比較では、留年経験群が日常生活不安の程度で高値を示した。日常生活不安は、「無事に単位を取れるか」、「卒業できるか」などを気にする進級や卒業に関する設問や、「大学で人が自分のことをどう思っているか」、「友達と一緒に何かしなければならぬ時にうまく協力してできるか不安な気持ちになる」などの対人関係に関する設問である。留年経験者は、留年経験により進級や卒業のことを気に掛けることが多く、留年により新たな人間関係を構築することへの、また、他人が留年した自分をどのように見ているのかなどに対する不安を感じやすく、このことが留年経験群の日常生活不安を強くしている一因であると考えられる。

次に、男女差をみると、日常生活不安および全体得点で男性が高値を示した。藤井³⁾は、関東地方にある国立大学5校および私立大学5校の2,782名を対象とした調査において、女子学生の方が男子学生よりも日常生活不安を強く感じていると述べている。また、山田⁴⁾は、男子で高不安者が少ないのに対して、女子で多いと述べている。一方で、徳田⁵⁾は、4年制大学生で、田中⁶⁾は、教育学部の学生で高不安者数の性差を認めなかったと述べており、性差については、これまで一定の見解は得られていない。女性に比べ男性が日常生活不安を感じてい

るとの本研究には、留年経験群の多くが男性であることが影響したのではないかと考えられる。また、この性差が全体得点で男性が高い値を示すことにつながったものと思われた。

一方、女性は大学不適応において高値を示した。大学不適応とは、「この大学にいて何か不安になる」、「こんな大学にいたら自分がだめになる」と言った不安である。久保⁷⁾は、女性は男性よりも「専門的知識や技術の習得」を重視し、学業不安が弱い代わりに卒業後の不安を強く、また早くから感じていると述べている。本研究の実施は、3年生の終わりの時期であり、数週間後には、長期臨床実習や国家試験対策、就職活動などのことを考えなくてはならない時期であったことから、そのことが、この結果に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

学生期の4年間におこる心理的变化に関して、徳田⁵⁾は、学科による違いがあると述べている。学科による大学生活不安の相違について山田⁴⁾は、情報系学科、社会科学系学科と管理栄養士課程の学生を対象にCLASを実施し、管理栄養士課程では、男女とも日常生活不安、評価不安、全体得点において藤井²⁾の報告している平均より高くなっており、大学生活にかかわる不安が強いと述べている。その理由として、カリキュラムが必須科目中心で自由度が低いものになりがちでかつ、目標のために継続して努力することが求められること、職業選択の結果と自分の適性の一致性に疑問を持ち、その結果、自信がゆらぐことによるとしている。

理学療法養成課程においても、管理栄養士課程と同様に必須科目が多く、職業選択をしてから入学することになる。このことから、理学療法学科の学生は、一般の大学生に比べ卒業までに多くの課題に直面することとなる。例えば、1年次では新しい生活への移行、大学のカリキュラム・授業への適応、新しい人間関係の構築など一般的な大学生と同様の課題が主であるが、2年次からは、本格的な専門科目の履修や検査・治療技術の習得、3年次では、はじめての臨床実習の履修、4年次では長期臨床実習の履修、卒業論文の作成、国家試験対策、就職活動が挙げられる。理学療法学科では、学年が上がるにつれ、より専門的な学習となる上に、学外で臨床実習が行われるために新しい環境に慣れることや新しい人間

関係を構築した中で課題の遂行が求められる。一般的に大学生生活不安は、学年が上がるにつれ低下していくといわれている^{3,6)}。藤井²⁾は不安の程度を示す得点が下がり、3年生以上では1年生に比べて有意に低かったと述べている。本研究の対象者は3年生であり、一般の大学生では不安が低くなる学年ではあるが、長期の臨床実習を間近に控えており、この時期に調査を行ったことが結果に影響していることも考えられる。

大学生生活不安の原因は、大学や学科ごとの特性により異なるうえに、人間関係や大学での課題などにも影響を受けると考えられるため、学生が不安を感じる要因についてさらに精査し、個々に対応していく必要がある。特に、留年経験者への支援が必要である。

今後は、各学年において授業実施期間、定期試験前などの条件下での不安の程度の変動について検討をするとともに、入学期からの経年的な変化や入試形態などとの関係について明らかにする必要がある。

引用文献

- 1) 山田剛史：大学生生活について—大学生の生活体験と適応意識—。ベネッセコーポレーション研究所報，2009，51: 58-63.
- 2) 藤井義久：CLASマニュアル。金子書房，東京，2013，pp1-23.
- 3) 藤井義久：大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討。心理学研究，1998，68(6): 441-448.
- 4) 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討。名古屋文理大学紀要，2006，6: 29-36.
- 5) 徳田完二：学生期ライフサイクルからみた学生の不安，4年制大学生と短期大学生の違いについて。人間福祉研究，2005，8: 179-188.
- 6) 田中 存，菅 千索：大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ。和歌山大学教育学部紀要教育科学，2007，57: 15-22.
- 7) 久保光正，徳田完二：心身両面からみた学生期のライフサイクル。北海道大学紀要，1999，49(2): 53-65.